

G.U.N. 建築計画室

文教大女子短大(非常勤) 川崎 衿子

〔目的〕 住宅及び住環境をより良くするための要因として、住宅を供給する側の水準向上と共に、住み手側の住意識が重要な役割を果している。住宅、住環境に関する学習(=住教育)は、現在の学校教育においては「家庭科」に委ねられているが、そこに於ける内容は、学習の領域、方法などが未だ定着しえていない状況を示している。本研究は、家庭科発足以来の住教育の変遷を明らかにし、住宅を良いものにしてゆこうという観点から今後の住教育のあり方の考察を試みたものである。

〔方法〕 文部省指導要領によれば、小、中、高校の家庭科は一貫性を持つものとされている。従ってそこに修められている住教育も当然その理念に従っていなければならない。そこで、戦後、家庭科新設以来の文部省検定の小、中、高校の教科書の査読を行い、その中住居領域の学習内容の推移状況を明らかにした。更に、その内容に含まれる問題点を取り上げ、考察を加えた。

〔考察及び問題点〕 現在の住宅事情の悪化、又住宅格差の激化は、否応無しに社会問題としてとらえざるを得ない。しかし住教育の学習の変遷を通していても住宅の外の現実の問題に関する記述が不十分であるが故に矛盾を常に抱え込んでいる事が明らかである。それらは学習指導要領の拘束性に起因することも多く又男女共修問題にからむなど、住居領域の位置づけが振れ動く状況の中で低迷している事も指摘する事ができる。更に教科書に登場する「家庭」の画一的な暮しぶりは、地域性、階層性にふれることなく終始している。住教育の内容の整備については、この分野での独自性をもった研究が望まれる所である。